

【コメント】

「騎士道とキリスト教」についての論評

アレクサンダー・ベネット

国際日本文化研究センター

ケッパ―教授がおこなった発表のテーマは私にとって非常に興味深いものです。と言いますのも、私はこれまで武士文化における武力の役割について広範な研究をおこなってきたからです。西洋の騎士と日本の武士は多くの点において一特に、宗教の問題において一異なっているものの、絶えず死の脅威に直面している職業的戦闘家として両者には気質面において類似点も数多くあります。与えられた時間は限られていますが、ケッパ―教授の論文に応答する形で、武士の経験についての私の所見を述べてみたいと思います。

ケッパ―教授はジュリアン・ピットリヴァーの言葉を引用し名誉と武力（暴力）の関係について次のように述べています：「名誉の究極的な擁護は肉体的暴力に存する（名誉を最終的に守ってくれるものは肉体的暴力である）。」

名誉という概念は武士文化にも非常に大きな影響を及ぼし、この概念は武士文化において様々な方法で利用されました。第一に、名誉という概念は武士の集団的アイデンティティー（独自性）を支えている独特な文化様式の基盤を形成したと言っても構わないでしょう。だからといって、私は貴族や農民には名誉を重んじる意識がなかったなどと言っているわけではありません。しかし、自分の命を犠牲にしても名誉を守ろうとした貴族や農民の例は極めて稀です。このことから、武士にとっての名誉は貴族や農民にとっての名誉とは異質なものであったことが分かります。

第二に、武士は名誉という概念の具体的な表現を利用して相互関係のための独特な慣習を作り出しました。そして、これらの慣習によってあらゆる地位の個々の武士と武士間の関係が規定されるようになりました。名誉という概念は武士の政治と社会生活において接着剤のような役目を果たしたのです。

第三に、武士は自分の家の名を高めたいという抑え難い欲望を持つようになり、自分の名を後世に残すために激しく競い合いました。この意味において、名誉を追い求め恥辱を避けようとする気持ちは戦闘での武勇や間断のない勇猛さと不可分に関連し合うようになりました。このような名誉の追求は武力を使用することができる能力を武士が最終的に独占するようになったこととも密接に関係しています。名誉は、十七世紀から十八世紀にかけての時代に「武士道」という名で知られるようになったもの一すなわち、武士が持っていた独特な一連の価値観一の最も主要な原動力だったのです。武士は、他とは異なる社会階級として成長してゆくにつれ、戦争と戦闘技術を名誉の究極の表現としてたたえる一連のしきたり（約束事／慣例）も作り上げました。

P. L. バーガーも言っていますように、「名誉という概念には、アイデンティティーは本質

的に一少なくとも、重要な程度にまで— 制度上の役割と関連しているという意味合いが含まれている」のです。同様に、平安時代後期から鎌倉時代にかけて武士階級が発展してゆくに連れ、武士であるということと不可分に関係している自尊心や、名誉の共同体（名誉という概念を土台にして築き上げられた武士社会）の構成要素である武士としての集団的アイデンティティーが武士の間に生じてきたことが分かります。

池上英子は次のように述べています：「武士を廷臣と区別立している最大のものは武士には武力を用いる能力も武力を用いることを厭わない気持ちもあるということである。武士にとって武力は自分たちの支配領域を拡大することを可能にするだけでなく自分たちの社会的存在を合法化（正当化）することを可能にする手段となったのである。武士は他の日本人から、紛争を解決し平和を保つ力を持っている人々と見なされていたのである。」

武力と名誉をこのように並置し武力を自尊心の中心的な構成要素として位置づけるということは武士文化の最もダイナミックな（力強く躍動感に満ちた）側面でした。後に、武士同士が争い合うのを思いとどまらせようとして喧嘩両成敗という制度が考え出されたり、武士文化の荒々しさを和らげようとして殉死— 平時における忠誠心の表現としての自害— が禁止されましたが、このような政治的な試みは武士たちの極めて激しい抵抗にあいました。

当然のことながら、名誉というものは武勇や武力によって表現されていたので「死」の問題は武士の存在にとって中核的な問題でした。西洋の騎士にも当てはまることですが、人を殺めるといふ仕事（任務）は様々な方法で正当化されたり弁護されたりしていたとはいえ、それは基本的には決して道徳的な行為としてなされていたわけではありませんでした。

西洋の騎士とは対照的に、日本の武士は非常に多くの神を信じており、様々な要素から成る武士の心には多様な宗教的影響が組み込まれていました。武士は数多の土着の神々や外来の神々にかけて忠誠の誓いを立てたり、他の神々にも戦での身の安全を祈願したりしていました。興味深いことに、仏教の教義では一般的に殺生は忌まわしい行為であると見なされているにもかかわらず、仏教機関は通例、人を殺めるといふ職業に従事しているという理由で武士について道徳を振りかざすような道学者的な判断を積極的に下すということはしませんでした。つまり、武力を行使するという武士の風習に対して仏教団体として異議を唱えることはほとんどなかったのです。

それでも、武士は武力を用い、人を殺めるといふ仕事をしていればやがては応報を招くことになるであろうということを十分認識していました。このような懸念を持っていたにもかかわらず、武士は他人の命を奪うという行為によって、自ら承知の上で、社会の他の階級の人々と精神的にも肉体的にも一線を画したのです。仏教の教義によれば、武士は阿修羅として地獄に生まれ変わる運命にある罪人（つみびと）でした。しかも、武士は常に血や死と直接関わりを持っていたため、穢れを忌み嫌うという神道の重要なタブーにも抵触していました。従って、神道の風習という視点から見ても穢れていたのです。

それにもかかわらず、宗教的なタブー（禁制）を犯しているということが原因で武士が武力を行使するという自分の職業を捨てることが助長されるということはありませんでした。それどころか、広く普及していた宗派である浄土宗などは武士に救いの手を差し伸べ、現象的に対

立する生と死は根本的には一体であるという「生死不二」の考えを説き生と死を存在論的に理解することを奨励しました。「無常」という概念も広く知られるようになりました。この言葉は、元来は仏教用語で、生を享けたものは全て死ななければならぬいかなるものも不変のままではないという教えを表している言葉です。「諸行無常」という用語も広く知られるようになりました。この言葉は万物は常に変化しており少しの間も不変であることはないという意味で、仏教の三法印（さんぼういん：仏教教理を特徴づける三つの根本的教説）の一つです。このように、仏教は、武力を行使する職業に従事している間に死に直面することから生じる武士の不安感や宗教的恐怖感に適切に対応することによって武士の心の琴線に直接触れることができたのです。さらにもう一つ興味深いことがあります。それは、日本の仏教は全般的に、切腹といったような武士の風習がますます広く普及するようになってからもそれに異議を唱えるようなことはしなかったということです。それどころか、仏教は、名誉を獲得し維持し続けようとする努力と武力とを基軸として武士文化がそれまでに既に進んで来ていた方向に向かって武士階級の文化的成熟をさらに押し進める手助けをしたのです。

西洋の騎士の場合にはキリストの像やキリストを見習って受難に耐えようとする気持ちは武力を行使する苛酷な仕事に取り組む動機を植え付けたりそのような仕事を正当化したりする上で大きな役割を果たしましたが、明らかに日本の武士の場合にはそうではありませんでした。武士の場合には、人を殺め自分の命を捨てる覚悟を決めるのに必要な動機とそのような行為を正当化する根拠は、死後も認められたいという強い願望と個人的な名誉を得たいという執念だけであったのです。このような気持から、自分の主君のために勇敢に戦いたいという感情的衝動が生まれたのです（もちろん、財政的な報酬の約束もこのような衝動を起こさせた要因の一つではあったのですが）。臆病な振る舞いをしているところを仲間に見られるようなことがあれば、それは武士にとっては大変由々しいことでした。臆病の汚名をこうむるようなことになれば、それは耐えられない恥辱であったからです。

次に、過激な武力行為の実践に関連した話をしたいと思います。武士は戦闘に従事しているときや慣習化した戦闘訓練（武術の稽古）をおこなっている時には自分が普段とは全く異なる「現実」や全く異なる世界の中にいることに気付きます。P. L. バーガーも述べていますように、「人は、ほとんどの時間、自分が知っているほとんどの他の人たちと一緒に普通の日常的な生活という隅々まで現実で固められたような実世界の中に自分が置かれていることに気付いている。しかし、人はこの平々凡々とした日常的な現実の中で日常的現実と断絶した状態も経験する。このような断絶状態は日々の生活において圧倒的優位を保っている日常的な現実の境界や果てにあるものとして経験される」のです。このような「現実（断絶状態）」は通常の現実とは全く異なる類のものです。このような現実（断絶状態）の中には明らかに心理作用（例えば、睡眠と目覚めとの境目の状態である夢）に基づいているものもあれば、激しい肉体的感覚（例えば、厳しい武術の稽古によって生じる苦痛の感覚や快い感覚）に基づいているのではないかと思われるものもあります。さらには、幻覚を感じるような経験もあります（例えば、麻薬によって引き起こされた幻覚状態や、戦闘に従事したり自分の命を賭けたり他人の命を奪ったりすることによって生じる薬物に起因しない高揚感など）。武士はこのような断絶状態に入っ

た時、突然自分が日常的世界の外に立っている気分になり、日常的世界というものが欠陥のある不合理な世界に見えてきます。さらにはそれが幻想の世界に見えてくることさえあります。日常的世界の現実味が突然薄れたり消えてしまったりするのです。このように、これらの断絶状態は性質的には全て、通常の世界の「外に立っている」ように感じるという意味において文字通り忘我の状態なのです。敵の首を斬り落としたり、さらには切腹によって自害したりする時にアドレナリンが沸き出てきて現実についての感覚が変わってしまう様（さま）を想像してみてください。このような忘我の断絶状態のいずれを経験した場合でも、通常の世界が相対的に見えるようになるだけでなく通常の世界には以前には気付かなかった特質があるということも見えてくるのです。もう一つの現実に移行するという経験をすると自己についての認識の仕方も他人についての認識の仕方も変わってきます。このような経験をすると人は本当の自分をさらけ出して今までとは根本的に異なる全く新しい究極的と思われるような方法で自分自身と向き合うようになります。このことは必然的に他の人間についてもそしてまた他の人間との関係についても従来とは異なる見方をするようになるということを暗に意味しています。このようなことが武士の世界において武力が果たした役割だったのです。

ここでケッパー教授に騎士が持っていた死に対する心構えについてご質問させていただきたいと思います。特に、生死の問題を超越している精神状態（生死超越）についてご質問させていただきたいと思います。日本では戦国時代とその後の時代に優れた武士の体験や技術が体系化され「流」と呼ばれる武術の流派が数多く生まれました。多くの場合、このような流派では秘伝の教えが一特に、生死についての不安を超越した精神状態に関する奥義が一 伝授されていました。この精神状態を描写するために多くの用語が使用されています。例えば、「平常心」、「常の心」、「水月」（水面に映る月）といったような言葉が用いられています。西洋の騎士もまた自分たちの戦闘経験に基づいて死の問題に対して特別な心構え 一騎士を社会の他の人々と区別立てするような特別な心構え一 を持っていたのでしょうか。また、そのような特別な心構えに関連した特殊な用語もあったのでしょうか。お教えいただけませんか。